

# 視察先別報告 エチオピア

## 【シニア海外ボランティア】

### 水道施設計画シニア海外ボランティア、電気施設設計シニア海外ボランティア活動視察

#### 概要

人口増加が著しい首都アジスアベバ市の水道供給能力は約50%で、漏水などによる無収水率は40%近い。アジスアベバ市上下水道局は水道供給量を増加するため、水源開発、浄水場拡張やリハビリ、水供給システム改善などの事業に取り組んでおり、特に漏水量削減等の無収水対策を重点課題としているが、経験値のある技術者が不足している。そこで漏水対策などの経験を有するシニア海外ボランティアは、無収水率の改善について事業への助言を行う。また上水道の管理システムの導入・整備に係る技術的な指導や助言、既存の電気制御設備の改善についての取り組みも行う。同局に派遣されているボランティアが互いに協力して課題解決にあたることが期待されている。

01

井口 久美子 アジスアベバの水道供給率は約50%で、漏水、盗水、水道メーターの故障などが原因で、無収水率は40%近いと言う。ちなみに東京は約4%である。水道メーターは日本のように8年ごとに取り換える規定はなく、壊れるまで修理して使う。水道の使い方も荒く、すぐ壊れる。日本で研修を受けたエチオピア人がいるが、日本の技術が進んでいることを知っていながら自国を改善できないことにエチオピア人スタッフが大きなジレンマを感じているようで、彼らとの信頼関係を大切にしながら指導に当たっている苦労が感じられた。エチオピア人スタッフの自立を目指し大きな役目を背負っている責任感を強く感じた。シニア海外ボランティアの人柄が垣間見える話が聴け、我々の刺激にもなった。

02

板野 光司 2人のシニア海外ボランティアが水道局で働いていた。マネジメントと電気系の技術指導をされていた。二人とも定年退職後、日本に家族を残しこちらで活躍されているとのこと、頭が下がる思いだった。マネジメントでは、日本のやり方がエチオピアで受け入れられることは少なく、大変苦労しているように見受けられた。エチオピアの人は、日本らしさは期待しておらず、エチオピアらしいやり方で成果を出したいと考えているように映った。日本での研修に参加した職員もいるとのこと、お互いの国の違いを理解した上で協働しようという試みは大変良いと感じた。一方で技術は世界共通言語である。エチオピアの技術者も日本の技術で問題解決することを大いに期待しており、役に立っているように感じた。

03

今村 健司 水道設備の無収水対策は、重要かつ気の遠くなる大変な作業だ。水道管を流れるうちに40%が失われてしまう。東京都が3.7%だから相当なロスだ。ほぼ毎日市民から寄せられる断水の知らせに対してエチオピア人技術者リーダー達は毎日奮闘する。シニア海外ボランティアとして派遣されたお二人は、そんな努力を日々続けるリーダー達を支えたい、という。日本人に対する印象は大変良い。これまでの真摯な支援があるから気持ちよく働けるのだ、とお二人とも知っている。オフィスに案内され、電気工学の本の隣にエチオピアの歴史本が置いてあるのが目に入った。エチオピア人が何故そう考えるのかを理解しようと努めるその姿勢。なかなか変わらない状況のなかで、「広い世界のなかにこんな国が一つくらいあってもいいじゃないか」と相手を認める懐の深さ。深い愛情で包み込むその姿勢に感じ入り、気がつくとも目から涙がこぼれていた。

04

久保 雅義 「蛇口をひねればそのまま飲める水がでてくる」のが当たり前の日本においては、上水道供給のインフラ整備とその管理について考えさせられるチャンスはほぼない。首都アジスアベバの水道インフラは上水道の水の供給こそ整備されてきたが、その40%は水道料を徴収できずに消えてしまっている。この無収水問題に立ち向かうシニア海外ボランティアとして水道・電気設備に関わるお二人は、日本では既に「引退」がちらつく年齢である。この年齢にならないと、ボランティアというポジションでこの仕事はできないが「生きがい」の実現として他の人にも大いに勧められると言われた。今の日本で1) 引退に近く、2) 健康で、3) 技術指導に生きがいを感じられる人材はどれほど存在するのでしょうか？私自身もシニア海外ボランティアを考えてみてほしいなと思われた。

- 05 進藤 千枝 「電気」「水」「トイレ（下水）」は、ライフライン。その整備にシニア海外ボランティアとして活動している河村さん、桑田さんには、日本人の誇りを感じた。エチオピアで働き、指示しながら作業するには困難も多くあるだろう。しかしそれを上回る生き甲斐・働きがいもあるだろうと思った。この国の歴史や風土、国民性にまで深い理解を持っていることにも感銘を受けた。この国のあり方や国作りに関わっているという誇りを胸に「100年後」のエチオピアの未来に希望を見いだしていた。自己の経験が活かせるシニア海外ボランティアは、日本の国際協力の良さではないだろうか。
- 06 塚田 好美 シニア海外ボランティア（SV）の「立場」と「役割」そして「責任」。この3点について考えた。SVの「立場」は日本から派遣された「ボランティア」。雇用主でも従業員でもない。指示を受け入れてもらえなかったり、大事な決定はできなかったり、立場と責任の面から与えられる権利が限られる。また、ずっとこの地で働けるわけではないSVが、自分で問題を解決してしまうと、現地の人に技術が身につかない。SVの役割は技術を現地に伝えることであり、主体的ではなく、補佐的に働かなくてはならない。これらを担うSVは、自分の立場と役割を理解した上で活動しなければならず、やりすぎてもやらなさすぎてもいけない。このようなヒトを伴う事業は、地道で長期的なものであり、日本や日本人気質を大いに活かすことができる国際協力のあり方だと感じた。
- 07 富田 すみれ子 視察不参加（体調不良の為）
- 08 中村 明夫 アジスアベバ市の現状40%の無収水率を2020年までに20%にすることが目標となっている。しかし、日本より派遣されたシニア海外ボランティアお二方のご説明を聞くにつれ、それがスローガンでしかないことを実感した。無収水の主な原因が漏水であるとお伺いしたが、それは現象に過ぎない。真の原因は、働いている水道公社員の無責任体質にある。漏水は、原因ではなく、その結果であると思う。漏水対策をやってもやらなくても待遇が変わらないのであれば、誰もやらないだろう。改善提案を十分理解していても実行しないという状況は、民営化など強烈なインパクトが無ければ今後も続く可能性は高い。シニア海外ボランティアの皆様は、仕事に責任を持つことを言い続けることで十分その職責は果たされていると思う。
- 09 橋本 佳澄 他の視察先でも感じたが、青年海外協力隊の隊員たちは派遣先での2年を大変短いと思うようだ。みな焦っているし、憤っている。こんなインテリジェンスのある人たちが能力を十分に発揮できずにいるのはエチオピアにとって損失だろう。2年終わればまた新しい人が来るが、その度に現地の人との信頼関係を築き直さないといけないのではないか。中途半端で活動を終わらせることに対して無力感を抱いて帰国するより、納得できるまで何らかの形でプロジェクトに携われる派遣内容があってもいいと思う。
- 10 三谷 剛 「世界にこのような国が一つはあってもいいではないか？」シニア海外ボランティアの一言が国際協力の根幹を言い当てているように感じました。この言葉は水道局のトイレの水が止まっても悠長としているような問題意識の低さが話題になった時でした。「スピード第一」「成長」が良し、それ以外はダメというのは画一的な考え方ではないかと思いました。エチオピアは西欧列強の植民地化から自国を守り抜いたアフリカで唯一の国であり、3000年の歴史を持ちます。それ故に誇り高く、変化を避ける傾向があると一般的に言われています。そこから醸成されている国民性は尊重されるべきです。誰が国民性を変えるのか？変えることが出来るとしたらエチオピア人しかおらず、援助をしている日本ではないと思いました。国際協力=支援であり、一方的な関係を築く国もありますが、日本は相手国の国民性を尊重した上で支援していくという心構えを聞いたように感じました。
- 11 金子 卓渡 エチオピアの日常を陰ながら支える日本人の姿に感銘を受けた。水資源には比較的恵まれているが、40%と高い無収水対策が喫緊の課題である。シニア海外ボランティアのお二方もかなりのベテランだが、現地職員の教育水準の低さや問題を問題と思わない姿勢には苦労されている様子だった。日々、仕事の合間を縫って彼らの教育をしているという。現地職員が来日して研修を行うも、シニア海外ボランティアに大きく依存している現状から今後どのようにして自立していくかが問題と言える。国民のほとんどが毎日使う水道。一般市民が身近な部分で日本の支援を認知しているのかは不明である。首都には韓国の先進的な総合病院があり、現地での評判も良い。「分かり易く効果的な支援の在り方」とシニア海外ボランティア桑田さんは語る。決して恩に着せるということではないが、支援を市民に認知してもらおう仕組みをつくるべきだろう。